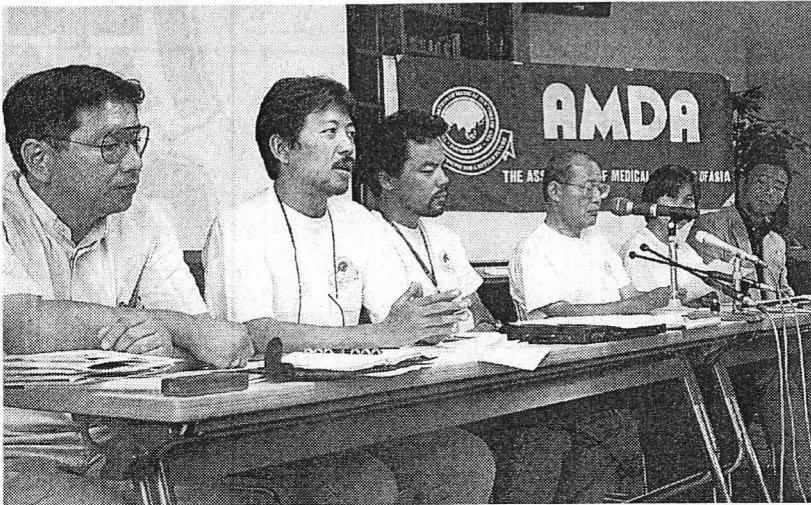


# 避難民の救援へ 長期的対応訴え

## 西ティモールから帰国



西ティモールから帰国し、会見する日本チームのメンバーたち

インドネシア・東ティモールの内紛に伴う避難民救援のため、国連の非政府組織（NGO）「アジア医師連絡協議会（AMDA）」が西ティモールに派遣していた医療チームが五日帰国し、岡山市のAMDA本部で記者会見。メンバーは「依然として避難民の流入が続き、長期的な対応が必要」と訴えた。

AMDAは、日本から医師二人、調整員一人、看護士・婦二人、ボランティア

一人の計七人を派遣。九月二十一日から順次現地入りし、二十四日から十月二日まで医療活動を行った。

このうち、五日朝に帰国した医師で衆院議員の中桐伸五さん（五〇）▽調整員の栄

永唯利さん（三九）▽看護士の小林直樹さん（三五）▽看護婦の俣崎希代子さん（三九）▽カトリック教会神父でノート

ルダム清心女子大助教授の原田豊己さん（四七）が会見した。

チームは、西ティモールのケファメナムなど三カ所

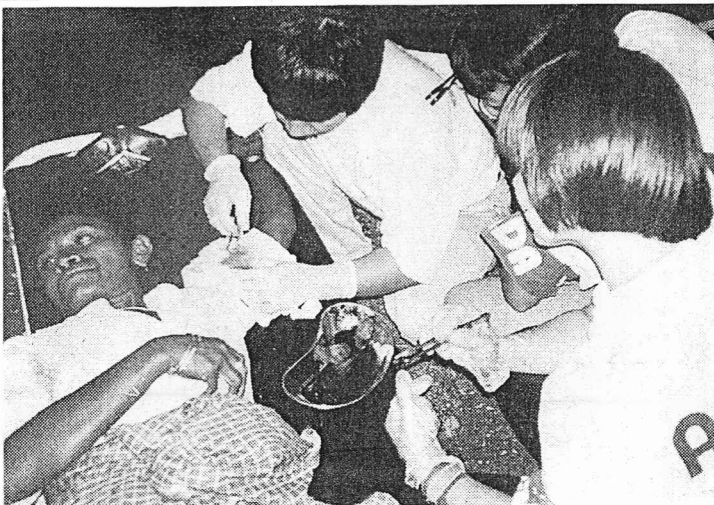
のキャンペーンで診療活動を展開し、約九百人の避難民を診察。

このうちの三四割はアメーバ赤痢などの腸管感染症、一割がマラリアで、外傷はキャンペーン内でのものがほとんど。精神的なストレスに悩む人たちも少なくなかったという。

「キャンペーン内は平穏だったが、『銃で足を撃たれた少女が町の診療所に運ばれた』との情報が入って駆け付け、手術を補助した事例も」と栄永さん。ボランティアとして参加した原田さん

は「現地は九割がカトリック教徒。神父と医師の組

み合わせの活動が功を奏した」と振り返った。



西ティモールで医療活動を展開するAMDA日本チーム（AMDA提供）

みが九月十七日に現地入り。日本チームが引き揚げた現在も、医師と看護士三人が活動を続け、五日にパキスタンからの医師三人が合流した。